〔萬葉集略解十二〕能は熊の畫の失たるなるべしと契冲いへり、神代紀熊野諸手船、または卷六眞熊野の船とよみたれば、くまのぶねなるべし、紀伊の熊野也、

〔夫木和歌抄三十三船〕正治二年百首御歌　喜多院入道二品のみこ

あはぢ舟

あはぢぶねきりがくれこぐさほ歌の聲ばかりこそせとわたりけれ

〔萬葉集四相聞〕賀茂女王贈大伴宿禰三依歌一首

筑紫船未毛不來者豫荒振公乎見之悲佐

〔空穗物語藤原の君〕こゝは、主のみことも、おとこ女、つとめて物がたりす、つくし舟のつかへ人も來たり、三百石のふねつきにけり、

〔堀川院御時百首雜〕海路　權少僧都永緣

追風にいたてにはしれつくし舟ゑきなみのせきせきとゞむとも

〔萬葉集七雜歌〕攝津作

作夜深而穿江水手鳴松浦船梶音高之水尾早見鴨

〔豫章記〕義弘通任、〇中略正平廿一年、豐前國小倉ニ押下テ、案內被申間、卽淺海八郎五郎、小山五郎、兩人給ル、此時豐前今搭御陣ニテ、一族中談合アリ、歸國ノ方便ハ、以船爲肝要也、御所被所望申ケル上使大豆津底將監兩人、葦屋船三艘水手十人下賜テ、船ニ可乘人ヲ配當ス、

〔夫木和歌抄三十三船〕家集寄舟戀　源仲正

えぞふね

わが戀はあじかをねらふえぞ舟のよりみよらずみなみまをぞ待

〔日本書紀二十五孝德〕白雉元年、是歲遣倭漢直縣、白髮部連鐙、難波吉士胡床於安藝國、使造百濟船二隻、